



相澤秀人、ステップス初個展である。相澤は画廊外に立体小品を9点、画廊内に立体中型を11点、出品した。画廊で『2007-2009』のリーフレット、『2008-2016』のパンフレットが配布されていたので、そこから引用すると相澤は1947年東京生まれ、71年東京芸術大学美術学部卒業、1981年、神奈川県美術展(県民ホールギャラリー)に参加、93年にGallery Qで個展とグループ展、1999年、Est-Nord-Est(Quebec)でアーティスト・イン・レジデンス、かねこ・あーとギャラリーで2003、07年に個展、06年グループ展参加、2008-13年に四谷アートステュディオムに在籍、岡崎乾二郎応用ゼミ修了、2015年に神奈川県美術展に参加している。控えめな略歴で、実際の活動歴は更にあるだろう。相澤が考えていることは、壁の内側にある作品と、壁の外側になる作品がどのように見えるかにある。デッサンの授業ではないが、人間は立体を認識する際、立体の裏側を想定しながら見ている。ハリボテでがっかりするのはそのためである。相澤は見える所と見えない所の想像力を追求している為、壁と床の区別はないというので、ここではあえて写真の上下左右をこだわらずに並べてみた。

『2008-2016』のパンフレットに掲載されている写真を見ると、加工した木の素地を見せながらも一部着色して立体を形成していた過程を確認することができる。ここに掲載されている作品群が、当初は全体像を明らかにしているが、徐々に今回の作品のように壁の裏表を越境するスタイルに移行している姿が伺える。『2007-2009』のリーフレットを見ると、木に荒く筆致を残して着色したオブジェと呼べる物体が壁にかけてある。相澤の文章の「生物(学)的な構造と生物における建築(学)的構造」という語彙が目



飛び込んでくる。ここから脱却して、今日の作品に至っているのではないだろうか。

相澤の作品をみると、立体物が見る者の体内に侵入し、見えない部分が手や足などの自らが見える肉体の一部として可視化しているように感じる。つまり、見えない部分を想像するのではなく、見えている部分こそ見えていると思

い込んで実は見ることのできない自己の肉体の内部、脳や臓器、否、もしかしたら「心」なのかもしれないと感じる。

「心」とはどこで生れるのか。太古から現在に至っても解明できない。「脳」が生み出す幻想なのか、「心臓」に依拠しているのか、それとも心理、無意識の中に存在するのか。すると無意識はどこにあるのか。宇宙の起源を問うのと同じだ。宇宙はいつ始まったのかを問うよりも、時間の発生を問題にすべきだ。時間は、人間だけが所有する。

